

# コロナ禍における海外研修 ～2022 年度アジア文化研修実施報告～

An Overseas Study Program during the Coronavirus Pandemic  
～A Report on the Implementation of the 2022 Asian Cultural Study Tour  
to Laos～

増原善之  
(非常勤講師)

キーワード：アジア、ラオス、ルアンパバーン、文化研修、コロナ禍

## 1. はじめに

地域文化学科では、2023 年 3 月、ラオスのルアンパバーンにおいて 2022 年度アジア文化研修を実施した。研修地のルアンパバーンは、この地域が「ランサン王国」と呼ばれていた時代に都がおかれていた歴史ある街であり、1995 年にはユネスコの世界遺産に登録されている（【図 1】参照）。メインストリートには旧王宮（現在は博物館）や古い寺院などが数多く残り、王国時代の栄華を今に伝えている。

本研修は、2020 年 2 月にも計画されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大のために中止となり、それ以来、実施できない状態が続いていた。2022 年半ば以降、日本とラオス双方の検疫措置が段階的に緩和されたことを受け、研修実施に踏み切ったものである。本稿では、準備から現地での研修活動に至る全過程を振り返り、その成果と課題について報告する。



【図 1】ラオスと周辺諸国

## 2. 科目の概要

### 1) 「アジア文化研修」(秋学期集中：2 単位)

同研修は地域文化学科専門科目（隔年開講）であり、対象は同学科 2 年生および 3 年生である。

### 2) 「アジア文化研修計画」(秋学期：1 単位)

研修参加者には事前学習として履修が義務付けられた。具体的な授業内容については後述する。

### 3. 準備

#### 1) 研修実施決定に至るまで

##### (1) 始動

本研修の準備が動き出したのは2022年6月上旬であった。その契機となったのは、6月1日時点で日本とラオス双方において検疫措置の大幅な緩和が確認できたことである。これにより、ワクチン接種証明書の提示およびラオス出国前72時間以内のPCR検査実施と陰性証明書の提示義務はあるものの、ラオス渡航自体は可能になったのである。

##### (2) 学内での検討開始

本学では、「新型コロナウイルス感染症拡大防止にかかる島根県立大学の教育・研究・諸活動に関する方針」に基づき、外務省発出の「感染症危険情報レベル」がレベル2（不要不急の渡航はやめてください）以上の国（地域）への渡航については中止もしくは延期を要請するとしていた。7月1日、外務省がラオスの「感染症危険情報レベル」をレベル2からレベル1（十分注意してください）に引き下げたことにより、研修実施に向けた検討を開始する条件が整った。

7月27日に開催された松江キャンパス教務委員会ならびに国際交流委員会において、増原より研修計画、費用、現地の状況、新型コロナ対策等について説明を行い、実施の可否について審議が行われた。議論の末、現地の医療体制およびコロナ陽性者が出た場合の現地支援体制の有無について確認するために現地調査が必要とされ、その調査結果を踏まえて再審議を行うこととなった。

##### (3) ラオスにおける現地調査

上記(2)を受けて、8月後半、増原がラオスに赴き、下記の通り、現地調査を行った。

##### ① 旅行代理店との協議

今回の研修実施にご協力いただいた旅行代理店の東京本社およびビエンチャン支店の担当者とオンライン協議を行い、ラオスの医療機関について最新情報を得るとともに、研修地でコロナ陽性者が出た場合、ビエンチャン支店を通じて、ルアンパバーン在住のガイドを派遣し、現地で支援にあたってもらえることが確認できた。

##### ② ルアンパバーン県での現地調査

8月23日～26日、同県ルアンパバーン市およびナンバーク市において現地調査を行った。2019年度に計画されていた研修では、ルアンパバーン市の中心部から車で3時間半ほど離れたナンバーク市の村でホームステイすることを研修プログラムの大きな柱と位置付けていた。ラオスの農村で伝統的な高床

式住居に宿泊し、現地の人びとと寝食を共にするという経験は、何物にも代えがたく、真の「文化研修」に値すると言えるが、万一、滞在中にコロナ陽性者が出た場合、村の診療所では対応が難しい。さらに、我々がそれとは気付かないうちに外部からウイルスを持ち込み、ワクチン接種が完全には行き渡っていない村人に感染させてしまうリスクもある。熟慮の末、村でのホームステイは断念し、宿泊および訪問先をルアンパバーン市内およびその近郊に限定することにした。これにより、万一、コロナ陽性者を含む傷病者が出た場合でも、1時間以内にルアンパバーン県立病院での受診が可能となった。

#### **(4) 日本側検疫措置の一層の緩和**

9月7日付外務省（日本）の通告により、ワクチン接種証明書（ワクチンを3回接種したことが確認できるもの）を保持している、すべての日本入国者・帰国者について滞在国出国前72時間以内のPCR検査実施と陰性証明書の提示が不要になった。これにより、ワクチン接種証明書さえあれば、ラオス入国時のみならず、日本帰国時も、検疫措置が事実上なくなることになり、研修実施の可能性がさらに高まったのである。

#### **(5) 研修実施決定**

9月13日、国際交流委員会・教務委員会合同会議が開催され、増原より現地調査の結果および日本側検疫措置の緩和について報告を行い、再審議の末、研修を実施していく方向で了承された。

翌9月14日、拡大運営委員会が開催され、前日の国際交流委員会・教務委員会合同会議の結果を踏まえて審議が行われた。その結果、「今後、状況が大きく変化した場合は改めて対応を検討する」という留保付きながら、研修実施に向けて学生募集を始め、準備を進めてよいとの判断が下された。

### **2) 研修実施決定以降**

#### **(1) 学生募集開始**

秋学期の履修登録期間（9月26日～30日）に間に合うよう、9月20日、地域文化学科2年生および3年生を対象に「アジア文化研修オンライン説明会」を行った（履修登録最終日の9月30日まで録画を視聴可能とした）。その結果、履修者数は2年生15名、3年生8名の計23名（うち女性19名、男性4名）となった。シラバスには「参加人数は最大15名」と記載していたが、コロナ禍のために3年連続で研修実施が見送られた経緯を踏まえ、学生の選抜等を行わず、23名全員の研修参加を認めることにした。これに地域文化学科から増原を含む教員2名が引率者として加わり、総勢25名でラオスを目指すこととなった。

#### **(2) 「アジア文化研修計画」の実施**

毎週火曜日1限目に実施した事前学習のおもな内容は以下の通りである。

### ①ラオス渡航にかかる諸準備

コロナ禍における海外研修であるうえ、研修参加者の 8 割以上が海外旅行未経験者であったことから、ラオス渡航に関する情報の伝達および確認にかなりの時間を割き、入念な準備を行った。特に、日本とラオス双方における新型コロナウイルスの感染状況や検疫措置に関する最新情報を入手し、その都度、適切な対応策を作成し、周知に努めた。

### ②ラオスについての事前学習（グループ活動）

研修参加者を 7 つのグループに分け、各グループが下記のテーマから 1 つ選んで下調べを行い、毎回 1 グループずつ発表を行った。

テーマ：歴史、上座部仏教、精霊信仰、少数民族、生活、自然と農業、国際協力

### ③基礎ラオス語の学習

ラオス語のあいさつ、基本表現、数字について学習した。当初、ラオス語を使って買い物ができるレベルを目標にしていたが、時間的な制約のため、そこまで到達することはできなかった。

**【表 1】 アジア文化研修の安全対策〔新型コロナウイルス対策を中心に〕  
(2022 年 2 月 7 日時点)**

#### 1. 空港検疫措置

- (1)ラオス入国時：検疫措置なし
- (2)日本入国時：ワクチン接種証明書の有無によって対応が異なる
  - ・ワクチン接種証明書携行者（24 名）：検疫措置なし
  - ・ワクチン未接種者（1 名）：ラオス出国前 72 時間以内にルアンパバーン県立病院で PCR 検査を実施

#### 2. 抗原検査

- (1)出発の 1 週間前から健康観察を行い、出発前日と出発当日に各自で抗原検査を実施。
- (2)研修中に体調不良等があれば別室待機の上、抗原検査を実施。
- (3)帰国後 3 日目の朝まで自宅待機とし、抗原検査の結果が陰性であれば、これを解除する。

#### 3. 傷病者が出た場合の対応

- (1)ルアンパバーン県立病院で受診。
- (2)事務局作成の連絡網にしたがって、本学担当者へ連絡。
- (3)傷病者への具体的対応について保健管理委員会と協議。
  - ・当該傷病者が新型コロナウイルスに感染していた場合、その他の研修参加者は、（陽性者が発症した日を 0 日目とすると）1 日目はホテルで待機、2 日目朝の抗原検査で陰性が確認できれば、研修を再開。念のため、3 日目朝も検査を実施。
  - ・引率教員がコロナ陽性者と接触する場合は、N95 マスクを着用する。
- (4)学生が傷病のため帰国を早める場合あるいは現地での治療等のため帰国が遅れる場合は、引率教員のうち 1 名がこれに同行する。

#### 4. マスク着用

- ・室内ではマスクを着用する（窓を開放している建物内は除く）が、屋外では不要とする。

### (3) 安全対策の作成

今回のアジア文化研修は、コロナ禍という特殊な状況下での海外研修となったため、従来の海外研修で使用していた安全対策とは異なるものを一から作成する必要があった。特に、出発前、研修中、および帰国後において、どのように抗原検査を行うか、研修中に傷病者が出た場合、本学との連絡および現地での対応をどのように進めるかにつき保健管理委員会と協議を重ね、【表 1】のような安全対策を作成した。

## 4. 研修活動

### 1) 本学出発からルアンパバーン到着まで（1日目～2日目）

本学出発前日の抗原検査において、学生 1 名が陽性か陰性か判断のつきにくい結果となり、関係者の間に緊張が走った。幸い医療機関での再検査の結果、陰性が確認でき、医師からも海外渡航をして問題ないとの所見が得られたため事なきを得た。

2023 年 3 月 18 日午前、教職員のみなさんに見送られるなか、研修参加者 25 名が全員揃って松江キャンパスを出発し、関西空港へと向かった。関西空港近郊のホテルで前泊したのち、翌 19 日、予定通り関西空港を飛び立った。ベトナム・ハノイのノイバイ空港での待ち時間が相当長く、学生たちが待ちくたびれてしまうのではないかと心配したが、見るもの聞くもの（そして食べるものも）すべてが新鮮であり、あっという間の 5 時間だったようだ。ノイバイ空港でラオス航空機に乗り換え、現地時間午後 8 時過ぎにようやくルアンパバーン空港に降り立った。本学出発からすでに 36 時間余りが経過していた。

### 2) ルアンパバーンでの研修（3日目～6日目）

研修 3 日目の朝、日本語ガイド 2 名が合流し、いよいよルアンパバーンでの研修がスタートした。実質 4 日間と期間は短いものの、学生たちにとって取り組み甲斐のあるプログラムを用意できたと思っている。【表 2】の通り、プログラムは多岐にわたるが、大きく分けると次の 5 つの柱からなっている。

- ①歴史と文化：王宮博物館および UXO（不発弾処理プロジェクト）資料館  
見学、托鉢体験、マイ寺およびシェントーン寺見学
- ②少数民族と精霊信仰：モン族のシャーマンおよびナーウアン村訪問
- ③生活：The Living Land Farm（農業体験）、Ock Pop Tok（機織り・染め物体験）、朝市見学、Park Houay Mixay Restaurant（ラオス料理）  
Sao Sinh（民族衣装試着体験）〔任意参加〕
- ④自然：Luang Prabang Elephant Camp（ゾウ乗り体験）、クワンシーの滝  
メコン川遊覧船

⑤交流活動：ポーンサアート村小学校訪問

【表 2】2022 年度アジア文化研修日程表

	日付	現地時刻	スケジュール
1	2023 年 3 月 18 日(土)	10:15 11:20 11:40 16:35	大学集合 出発式 大学発〔貸切バス〕 関西エアポートワシントンホテル着〔同泊〕
2	3 月 19 日(日)	07:30 07:45 10:30 13:55 19:10 20:20 21:20	関西エアポートワシントンホテル発〔貸切バス〕 関西空港着 関西空港発〔VN331〕 ハノイ着 ハノイ発〔QV314〕 ルアンパバーン着 Sala Prabang Hotel 着〔同泊（以下同様）〕
3	3 月 20 日(月)	午前 午後	王宮博物館、マイ寺 UXO（不発弾処理プロジェクト）資料館、シェント ーン寺、Park Houay Mixay Restaurant
4	3 月 21 日(火)	午前 午後	The Living Land Farm（農業体験・昼食） Luang Prabang Elephant Camp クワンシーの滝
5	3 月 22 日(水)	早朝 午前 午後	托鉢体験、朝市見学 ポーンサアート村小学校訪問 モン族のシャーマンおよびナーウアン村訪問
6	3 月 23 日(木)	午前 午後	Ock Pop Tok（機織り・染め物体験） Sao Sinh（民族衣装試着体験）〔任意参加〕 メコン川遊覧船
7	3 月 24 日(金)	午前  午後 16:55 18:05	※体調不良者が多数出たため、ルアンパバーン県観 光局訪問を取りやめ、自由行動に変更 自由行動 ルアンパバーン発〔QV313〕 ハノイ着
8	3 月 25 日(土)	00:40 06:40 09:00 14:05	ハノイ発〔VN330〕〔機内泊〕 関西空港着 関西空港発〔貸切バス〕 大学着・解散式

紙幅の都合上、それぞれのプログラムに関する詳しい説明は控えるが、研修実施にあたり、特に留意した点をいくつかあげておきたい。

1 つ目は、単なる「見学」で終わらせずに、可能な限り「体験」を通して学ぶことができるよう心掛けた点である。例えば、③の The Living Land Farm では、全員が水田に入り、手綱を引きながら水牛を操って田起こしをしたり、巨大な圧搾機を人力で回してサトウキビのジュースを作ったりすることで、伝統的な農村の暮らしに直に触れることができた。また、Ock Pop Tok（「西洋と東洋の出会い」の意）では、機織りと染め物からいずれかを選択し、指導員

から一対一の指導を受けながら、およそ 3 時間かけて作品を完成させることができた。

2 つ目は、①の UXO（不発弾処理プロジェクト）資料館の見学を通して、一見平和で穏やかに見えるラオスにも苦難の歴史があったことを学ぶ機会を用意した点である。ベトナム戦争当時、アメリカ軍は北ベトナムを支援するラオスの共産主義勢力を殲滅するため、大量のクラスター爆弾をラオスに投下した。その一部が不発弾として、今なお地中に埋まっており、農作業の最中や山林を開墾するときなどに爆発して、多くの村人が亡くなったり、一命はとりとめたとしても、手足を失ったり、失明したりするなど重い障害を抱えつつ生活している。現在でも不発弾の処理作業が続けられているが、すべての処理が終わるまでには、およそ 150 年かかるのだという。学生たちはクラスター爆弾など戦争の惨状を伝える展示物を目の当たりにするとともに、被害者の生活の様子を伝えるドキュメンタリーを視聴し、一般にはほとんど知られていない、ラオスのもう 1 つの歴史を学ぶことができた。

3 つ目は、ラオスの子どもたちと交流できる機会を作ろうとした点である。というのも、村でのホームステイを断念したことで、学生たちが現地の人びとと触れ合う機会が限られてしまうのではないかという懸念があったからである。訪問地選びは少々難航したが、日本語ガイドの方に紹介していただき、⑤のポンサーアート村小学校を訪問することになった。約束の時間に小学校へ到着すると学生 1 人ひとりに手作りの花束が贈られ、ラオスらしい温かい歓迎を受けた。学生たちは 3 つのグループに分かれ、それぞれ低学年、中学年および高学年の子どもたちとの交流を楽しんだ。特に、低学年のクラスでは、本学でタイ語（言語的にラオス語と近い）の履修経験のある学生が、日本から絵本（『おおきなかぶ』と『のせてのせて』）を持参し、ラオス語で読み聞かせを行ったり、子どもたちと一緒に折り紙を楽しんだりした。屋外では、大縄跳び、ボール遊び、ラオス版「とうりゃんせ」などで汗を流し、言葉が分からないながらも、笑い声の絶えない楽しいひと時を過ごすことができた。

最後に一これは日程表には書かれていないが一学生たちには自由時間を利用して街歩きを存分に楽しんでもらいたかったという点である。市内中心部のメインストリートには、寺院や旧王宮といった歴史的建造物に加え、カフェ、レストラン、手工芸品店、衣料品店などが軒を並べているが、夕方になると、車両の立ち入りが禁じられ、車道はテントが立ち並ぶナイトマーケットに一変する。そして、隣接するフードコートとともに、内外からの観光旅行客で大変な賑わいとなる。このエリアは我々が宿泊したホテルから徒歩圏内にあったので、1 日の研修プログラムが終わると、学生たちは友人と連れ立って思い思いに夕食をとり、ナイトマーケットではショッピングのみならず、片言のラオス

語と英語、時には日本語をも交えながら、マーケットのスタッフたちとの会話を楽しんだ。好奇心の赴くままに楽しむ街歩きは旅の醍醐味の1つであるが、それをラオスという未知の土地で経験できたことは、学生たちにとって一生の思い出になったに違いない。

### 3) ルアンパバーン出発から本学到着まで（7日目～8日目）

研修7日目、つまりルアンパバーン滞在最終日の午前は、ルアンパバーン県観光局を訪問し、同局で勤務されている日本人専門家の方から、現地観光産業の現状と問題点についてお話を伺うとともに、現地の若手観光ガイドのみなさんとの交流会が計画されていた。

しかし、集合時刻になっても学生が揃わない。何人もの学生が、前夜から下痢をするなど体調を崩してしまったのだ。結局、症状が重い学生5名をルアンパバーン県立病院へ連れて行き、点滴等の治療を受けさせ、症状が軽い学生についてはホテルで休息をとらせることになった。したがって、観光局訪問は中止せざるをえず、貴重な時間を割いて準備をしてくださった専門家の方、観光ガイドのみなさんに大変申し訳ないことをしてしまった。

病院で点滴を受けた学生は、回復に向かったが、ルアンパバーンを離れる頃になって、さらに体調不良者が増え、中継地ベトナム・ハノイのノイバイ空港では、学生の半数が極度の疲労、腹痛・下痢などの不調を訴え、不安を抱えながら関西空港行きの飛行機に乗り込むこととなった。

8日目朝、関西空港に到着。しばらく休憩をとったのち、午前9時ごろに貸切バスに乗車し、およそ5時間後、松江キャンパスに帰着した。週末にもかかわらず、教職員のみなさんが出迎えてくださったが、学生の多くは笑顔で話をする体力も気力も残っておらず、出発の時とは打って変わって、静かな解散式となった。

## 5. 成果と課題

### (1) 成果

帰国後、学生たちには「アジア文化研修を通して学んだこと」というテーマでレポートを書いてもらった。特定のトピックについて掘り下げた論文調のものから、旅先で印象に残ったことを率直に書き綴った旅行体験記に至るまで、その内容とスタイルはさまざまだが、学生たちの旺盛な好奇心と鋭い観察力が随所に表れている点は共通していた。ここでは学生たちのレポートを読み返しつつ、本研修の成果についてまとめておきたい。

まず、最大の成果は、学生たちが体験を通して学ぶことの大切さを理解してくれたことである。これは4.の2)で述べたこととも関連するが、学生たちは、この2年ないし3年の間、地域文化学科において、さまざまな地域の文化の



ありようを学んできた。しかし、ある学生が述べていたように、それらの多くは座学にすぎず、異文化を目の当たりにし、自らの体験を通して学ぶことができたのは、これが初めてだった。また、インターネットの急速な進歩により、世界中のありとあらゆる情報や映像がリアルタイムで届く時代となったが、それで分かったつもりになるのは誤りであり、目の前で繰り広げられる人びとの暮らしを五感を使って受けとめることが何より大切なのだということを知ってもらえたようだ。

事前学習を行ったとは言え、ルアンパバーンに到着するまで、学生の大半はラオスについてほとんど何も知らず、経済的に立ち遅れた小さな国というイメージを漠然と持っているだけだった。そして、実際にラオスに滞在してみて、便利さや清潔さという点では日本の方がラオスより暮らしやすいと感じたようだ。しかし、学生たちは、表面的な違いだけですべてを判断するのではなく、ラオスの人びととの交流を通して、「人びとはみな穏やかで寛容」「切羽詰まったような人はおらず、余裕があって穏やかな雰囲気」「初対面でも人と人の距離が近い」「心の壁を感じなかった」「たとえ言葉が分からなくても、何かを伝えよう、相手のことを理解しようという気持ちが伝わってきた」というように穏やかで優しさにあふれた人びとの内面をきちんと感じ取ることができたようだ。ある学生の「初の海外で、ラオスを好きになれたことを何よりも嬉しく思う」という感想がすべてを物語っていると言えるだろう。

本研修は大半の学生にとって初めての海外旅行だったが、これを経験したことで、海外に対する心理的ハードルが下がったためか、「大学生のうちにもう一度、海外へ行きたい」という声を数多く聞くことができた。さらに、必ずしも便利で快適とは言えないラオスの暮らしを経験したことで、少々の不便さはそれほど気にすることなく、どこへ行っても適応できることだろう。学生たちの次なる海外体験に期待したい。

## (2) 課題

言うまでもなく、我々が直面した最も大きな課題は、帰国直前になって、多くの学生が体調不良に見舞われたことである。体調を崩した学生の症状は、大半が腹痛・下痢であり、頭痛、発熱、吐き気、湿疹（腕）の報告もあった。帰国後、学生8名が病院で診察を受け、複数の学生が「感染性胃腸炎」と診断された。幸い症状がさらに悪化する学生はおらず、1週間ほどで回復したことはせめてもの救いであった。

こうした事態を招いた原因であるが、腹痛・下痢を訴えた学生全員が同一の料理を食したわけではないので、原因を1つに特定はできないと考えられる。おそらく、最高気温 37～38℃という厳しい暑さによって体が消耗していた状態で、何らかの細菌に汚染された食品または水（氷）を摂取してしまったため

であろう。また、暑さをしのぐために冷たい飲料を摂りすぎてしまったことも一因かもしれない。この点につき学生に対する注意喚起が足りなかったのではないかと反省している。

食事や飲料によってもたらされる腹痛や下痢は、日本とは衛生状態が異なる国で研修を行う際、最も気をつけるべき問題である。しかし、現地で自由に飲食を楽しむことを制限すれば、安全は確保されるかもしれないが、果たしてそれで「文化研修」と言えるのかという思いもある。判断が難しい問題ではあるが、今回の経験から言えることは、「研修中の飲食については、事前学習等において十分な注意喚起を行うとともに、現地でも折に触れて指導するが、最終的に何を食べて何を飲むかということは学生たちの判断に委ねるしかない。日々の健康チェックはとても重要であり、旅行などでは羽目を外しがちになることが多いが、そういった時こそ十分な睡眠を確保するなど心身を休めることを心掛けたい。万一、体調不良を訴える学生がいれば、大学の保健室に連絡を取ることや躊躇なく現地の医療機関を受診し、治療を早期に開始すべき」ということになるだろうか。

楽しく充実した研修活動を行えたこと、新型コロナウイルスの感染者を出さなかったこと、そしてなによりも 25 名揃って出発し、帰国できたことなど、大きな成果を上げることができたとは思いますが、それと同時に 20 名を越える学生たちを海外へ連れて行くことの難しさを痛感した「2022 年度アジア文化研修」であった。

## 6. むすびにかえて

最初に「ラオスで研修ができないだろうか」という話が持ち上がったのは 2016 年の初め頃だったと記憶している。本学関係者の間でも「ラオス」と聞いて何かをイメージできる人は極めて限られており、本当に学生を連れて行って研修ができるのかと心配する向きも少なくなかったと思う。しかし、紆余曲折を経ながらも、多くの方々のお陰で 7 年越しの計画を実現することができた。この間、終始変わることなくご支援、ご協力くださった本学教職員のみなさん、当方のさまざまな要望に真摯に対応してくださった旅行代理店のみなさん、優しさに満ちた広い心で私たちを受け入れてくださったラオスのみなさん、そして溢れんばかりのエネルギーで研修に積極的に取り組んでくれた学生のみなさんに心から感謝を申し上げ、本稿を閉じることとしたい。